

少年の闇

高史明



径書房

高史明（コサミョン）

1932年、山口県に在日朝鮮人二世として生まれる。

成長後、東京に出て、さまざまな職業につきながら政治活動にも参加、10余年の独学を経て、最初の長編小説「夜がとぎの歩みを暗くするとき」を『人間として』に発表（1971年、筑摩書房刊）、以後作家生活に入る。

1975年、岡百合子夫人との間の一子真史君自死。それ以前から「歎異抄」を読みつづけたが、深い悲しみを契機にいっそう親鸞に親しむ。著書に「生きることの意味」「一粒の涙を抱きて」他。百合子夫人との対談「いのちの行方一人間とは何か」は径書房刊。

少年の闇 歎異抄との出会い 第一部

一九八三年三月二十五日 第一刷発行
一九八三年七月二十日 第四刷発行

定価 一二〇〇円

著者 © 高 史 明

発行者 原田奈翁雄

発行所 株式会社 径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二一三―五 影山ビル

電話 〇三―三三四―四六〇八
振替口座 東京 一一三二七二六

印刷 明和印刷株式会社
製本 京美印刷株式会社
株式会社 積信堂

少年の闇

歎異抄との出会い 第一部

高史明

目次

序

5

歴史の闇、小悪党

9

深淵、そして仄明り

61

無明の大夜

135

装画 前田常作

序

人間とは、何か。人間は、何をめざして、その人生の歩みを進めているのであろう。

「群生海^{ぐんじょうかい}」という言葉がある。広大な人々の世界を、海に譬^{たと}えていい表わした言葉である。私はこの言葉を耳にすると、全身に深い共鳴音のわき上がるのを覚える。人間は、一人一人が独立した人格である。この地球上には、数多くの人種と民族があり、それに属して、何十億という数の人々がいる。その一人一人が、それぞれに違う顔と独立した人格を持つのである。だが、その一人一人は、一人であると同時に、煌めく海の「群生海」でもある。一滴の水なくしては、海はなく、海なくしては、一滴の水もないのである。

また、人間のまわりには、他のさまざまな動物や昆虫たち、樹木や草たちが生きている。人間は、それら生きとし生けるものと、共に生きているのである。この生きとし生けるものの土台には、水があり大地がある。空気がある。さらに、この生けるものの世界は、光に包まれている。

いまあえて、群生という言葉をも、生けるもののいのちに根ざす言葉であると考えたら、人々と共にあるこのいのちの世界もまた、「群生海」という言葉によって包みとってよいであろう。

私は人生に深い疲労を覚えるとき、不安や孤独感に襲われるとき、しばしばこの「群生海」という言葉を思い浮かべたものであった。思い浮かべ、声に出してみると、いつも不思議な安らぎと、新しい活力の湧き出てくるのが感じられるのである。人間は、「私」という舟にのって生きるものであるが、その根本は、やはりいのちに根ざしていると見てよいであろう。このいのちによって立つなら、人間もまた、本質的には決して孤独ではないのである。

さらにまた、「一切群生海の心」という言葉がある。ともに、親鸞の言葉である。人間は、生きとし生けるものの世界にあつて、この世界を言葉をもって捉え返し、それを「群生海」と名づけることができる存在である。それは言葉を換えて言うなら、人間とは、心を持つものとも言える。人間は、心を持つが故に、万人に普遍的な「心」を追い求めざるを得ないものとなる。

私の人生も、この普遍的な「心」を求めての歩みでなかったろうか。人間はすべて、その人に固有の、いのちと社会の歴史につながる過去を持つ。その過去の結果としての現在の生を持つのである。人間はその生を担って、未来を切りひらく。その一人一人の人生が、さまざまな軌跡を描くのは、必然的であると言えよう。人によっては、不幸ばかりがつづくと思える人生を余儀な

くされるかと思えば、幸福ばかりがつづくと見える人生を歩む人もある。私のそれも、私に固有のものであった。穏やかな冬の陽ざしにも似た日々がなくはなかったが、その多くは、汚辱おじよくにまみれた暗雲の深い嵐の歳月であったと思う。その歳月が、いま静かに思い返してみると、たとえ無意識ではあったとしても、やはり普遍的な「心」をめざして歩まれた一筋の歩みではなかったと思えてならないのである。

もちろん私に、人生のときどきに抱いた、他の目標がなかったわけではない。生まれては消え、消えてはまた生まれる人生の目標を、私もまた自分なりに抱いたものであった。それらはしかし、根本的な目標ではなかった。それが、いまわかる。実現された目標は、実現されたが故に私から消えさり、実現されなかった目標も、実現されなかったが故に消え去った。この生まれては消え、消えては生まれる目標を追いつづけた五十年の歩みの中で、いまなお消えずしてあるのは、心を持つ者として無意識に求めつづけてきた普遍的「心」のみである。私もまた、いのちを授かり、心あることを己れの本質とする人の子であったと思わずにおれない。

人間、心なくしては人間たりえない。人はその人生をそれぞれ別様に歩むとして、その人がついに行きつかざるを得ないのは、この「心」の世界ではあるまいか。それはそれぞれ個別に心を持つ万人に普遍的な「心」であってみれば、きっと最も豊かな人間性に輝くものであろう。また、

それを「一切群生海の心」という言葉とともに考え合わせるなら、その輝きは、いのちの輝きと呼んでもよいのではあるまいか。

かつては、私にこの自覚がなかった。しかしいまは、いのちあるもの、心あるものとして、自分の五十年の歩みが、何をめざしていたかが、私にもはっきりと自覚されるのである。私はこの自覚に立って、五十年の歩みを振り返り、あらためて人が生きるということを考え直してみたいと思うのである。

歴史の闇、小悪党

一

「歎異抄」がいま、私の目前にある。遠い中世の昔から今日まで、いったいどれほどの人が、この書と向かい合っているであろう。その数は、計り知れない。ある人は、悲しみの極北に身悶えながら、またある人は、苦しみのどん底において、この書を繙ひもといてきた。その人々の中には、死に至る床においてなお、この書を抱きつづけ、そうすることによって、深い不思議な喜びを得ている人もいた。その書を、私もまた、心静かに繙きたいと思う。

一、弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

「歎異抄」は、私にとって、実に不思議な書であつた。それは私が、生か死かの窮地に落ちたとき、いつも向こうから現われてきた。私はこの縁の不思議を思う。私に呼びかけてくる声、それは何であつたのか。

「歎異抄」は、親鸞の書である。しかし、直接に書き著わしたのは親鸞その人ではない。親鸞が八十代の頃、まだ三十代の若さの唯円坊という弟子があつた。「歎異抄」は、その唯円が、親鸞没後二十有余年という歳月を経て、文字にして書き著わした親鸞の声である。唯円は書いている。「故親鸞聖人御物語之趣、所留三耳底、聊注之」。「歎異抄」は、唯円において生きていた親鸞の言葉である。それは親鸞の言葉が、人の言葉でありながらその位相を越えた真言であり、ま

さしくいのちの言葉であつたことを意味しよう。人のある限り続くいのちの声である。「歎異抄」の成立は、ほぼ一二八三年から一二九〇年の間であつたと推定されている。それから今日までの実に長い歳月の間、この書が数知れない人々によつて繙かれ、読み続けられてきたのも、人々が

この書に、まさしくいのちの声を聞き取ってきたからであるまいか。そうだとするなら、この書から私に向かつて呼びかけられていた声とは、いのちの声であり、この書と私の縁の不思議は、いのちの不思議であつたと言えるだろう。それは、私を生かしているいのちの不思議でもある。

二

かつて私は、この書を目前において、たえず読もう、理解しようとして試みてきたものであつた。しかしいま、読まれるのは、読もうとする私の方である。「歎異抄」は、私の目前にあつて、深く澄んだ鏡となり、読もうとする私に読まれながら、私自身を映し出してくるのである。

煩惱具足ぼんのうぐそくのわれらは、いづれの行ぎようにても、生死しやうじをはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて……

この第三章に言われる「煩惱具足のわれら」という言葉が、いま、まっすぐ私の胸を指差してくるのが、わかる。かつての私は、それがわからなかった。この私に、煩惱といわれているもの、

つまり身の煩^{わづ}いと心の悩みがなかったと言うのではない。それはないどころか、あり余るほどあった。若い頃私は、あの戦中から戦後にかけて、飢えにひどく苦しんだ。また、人生や性に悩み、病の不安にもたえず脅かされていた。人との関係にも苦しんだ。ただ、私はこの身に備わるそれらの煩い悩みに出会うと、目を常に外に向けようとし、外を見る目そのものを、その外に見えるものの上に重ねて、共に考えようとしなかった。それはまた、この身が、仏に愛れられている身であったという自覚がなかったことを意味する。その自分が、いま「歎異抄」に映し出されて、ありありと見えてくる。南無阿弥陀仏の声が聞える。南無阿弥陀仏の声に導き出されて見えてくる。愚かであった私。いまも愚かであることには変りはないが、愚かであることを自覚しなかった私。自覚したとしても、その自覚の鏡はおよそ鏡とはいえないほど曇りきったものであり、幻影をそれと自覚しないまま鏡と錯覚していた鏡であって、いかなれば錯覚された自分の中をぐるぐると廻りつづけていただけの私。絶望と呟くこと自体が、道化のそれとまったく変りない現象であったにもかかわらず、それと自覚せず、大真面目に絶望と思いつづけていた私。それは、まったく暗いとしか言いようのない私であったと言えよう。

「歎異抄」と最初の出会いを持ったときの私は、まさしくこの暗さのどん底にあった。それは愚か者が、その愚かさはつきりと自覚しないところに生じた暗さであってみれば、底知れない闇

であつたとも言える。この闇そのものとなつて蠢め^{うごめ}いていた自分の姿と心が、いま見える。

人間とは、何か。それが、その頃の私の謔言^{うわごと}のような思いであつた。人間とは、何か。歳は、二十三歳頃ではなかつたらうか。「歎異抄」が、目の前にひらかれていた。その二十三歳の頃、私は「歎異抄」の前に幾日坐りつづけたことであらう。しかし、それは「歎異抄」を読みつづけていたということではない。ふと気づくと、私は問いつづけているのだった。人間とは何か。そしてその度に、私を包む闇は、私の内と外で揺れた。あるときは不気味な沼の水面のように、またあるときは黒い炎の燃えさかる嵐のように。その揺れる闇は、気づいてみると、私のそれまでの歩みとともに深まってきたものであつた。

三

私は一九三二年、日本の西国の端にある小さい島で生まれた。その島は、彦島という。とはいへ、私は日本人ではない。私の両親は、いまの韓国の南端にある金海から、日本に渡ってきて、その彦島に定住していたのである。私は朝鮮人である。にもかかわらず、その当時、私は日本人であるとされていた。それは、日本によって朝鮮が、植民地にされていたことによる。朝鮮人の

私が、日本人であるとされていたのである。それは時代の闇と言えるだろう。私の闇は、出生のその瞬間からはじまっていた。朝鮮人の子として生まれた私が、どのような眼ざしのもとに日本人として教育されていったか。丁度、私が小学校に入る頃、私が生まれた下関の、ある小学校で出された朝鮮人児童の教育にかかわる文書がある。その「半島児童教育所感」なる文書の中に、その眼ざし的一端を求めてみよう。

「彼等がやがて成長の暁に、吾々内地の子弟が成長した時と同様の日本人意識日本精神の持主であるという境に達せしめる事である。この精神的中軸中心、これが鮮童教育の生命であり使命であると思う。極言すれば成績の良否は次の問題だ。

この根本義が確固と意識が得られたら教育の大半は達せられたと言つてよい。此の根幹を置いて他に骨折つても、それは枝葉に互^{むか}る徒勞である。

併合当時、内鮮一如一視同仁の聖慮を以て愛撫せらるる聖旨^{せいし}に副^そい奉る教育の出発の第一歩はこの中心点火のそれであろう。彼等幼童がすっかり日本児童になり切つてこそ、教育報国の実現であろう」。

そしてこの眼ざしは、次に示す態度と一つとなっていたものである。「事大主義に育つた民族とその子弟には、やゝもすると驕慢放縱不遜等の弊があつて抑圧、掣肘、徹底的矯正を必要とす

る事もある。厳正なる態度で臨むことは正しき教育の一面である」。

私は自分が入学する頃の小学校に、このような教育方針があったとは、近年にいたるまで知らなかった。知っていたとしても、ことの暗さに違いがあったとは思えない。ともあれ、私は植民地化されていた朝鮮の子どもとして、上記の眼ざしに囲まれて成長するのである。この暗さは、そこに目を凝らすなら、その上に、さらに戦争の重圧がのしかかっていたことが見えてくる。日本が中国に対して行った、いわゆる十五年戦争という長い侵略戦争の発端は、一九三一年九月十八日の柳条溝事件であった。それからほぼ四か月後に、私はこの世に生まれている。この戦争は、後に第二次大戦へと拡大して、彼我の間でかけがえのない人命が、おびただしく失われていくこととなる。どれほどの人が泣き、どれほどの人が傷つき、呻き、世を去っていったことであろう。私はさき上げた民族的な矛盾とともに、この戦争の放つどす黒い臭気を呼吸して大きくなっていくのである。

その上、朝鮮人でありながら朝鮮で生活することのできなかった私の両親の、この日本での生活は、極端に貧しいものであった。当時の統計数字は、あの時代の朝鮮人の職業のうち、もっとも多いのは、単純な肉体労働であったことを示しているが、私の父のそれがまた、石炭を担う単純労働であった。労働は辛いものであり、しかも賃金は、同じ労働に従事する日本人労働者の三